落合益夫君　ＢＯＸに協力。

今井克義君　ＢＯＸに

外山晴一君

山崎勲君

卓　　話：　「石川雲蝶」の作品と足跡　　木原フォート所長　木原　尚様

石川雲蝶の名は三条においては有名である。幕末の時代に、この越後の各地で彫刻の制作にあっていた。その彫刻は神社や寺院の向拝や欄間の装飾として彫られたものが多い。つまり神社本殿や拝殿、寺院山門や本堂が建立されると建物の破風（はふ）、妻飾（つまかざり）、紅梁（こうりょう）、木鼻（きはな）、手挟（たばさみ）、蟇股（かえるまた）、欄間（らんま）などの装飾に彫刻を施す彫工であった。これらの彫物には彫工の署名を記さないのが普通で通常は棟札に年号、施主、大工棟梁、大工、彫工、金物師などの名前を記して残すものであるという。なぜか雲蝶の作品には署名を記したものが多く見られる。

石川雲蝶は文化11年（1814年）江戸雑司ヶ谷の生まれ、雲蝶はいつの時代に越後の地を踏んだのであろうか。その記述は定かではなかった。各地で雲蝶の作品を探し訪ね、雲蝶の足跡の〈点〉を〈線〉としてつなげてみることにした。

雲蝶の作品には「石川安兵衛」「石川匠雲蝶」石川安兵衛源雲蝶」などの署名と、落款に「石川」「東匠」「正照」「雲蝶」など印が、また制作年号なども記されていたことにより、雲蝶の足跡を確かなものにする貴重な手掛かりとなった。中には署名もなく、雲蝶の作品と伝えられているものもあった。その真贋を問うつもりはないが、写真という映像の羅列から、雲蝶の作風が共通性を持って見えてくることも期待した。

上州永井宿を早立ちした雲蝶は、雨降りの小道を歩き三国峠の頂上にある権現様で一休みしていた。霞のかなたにある越後の方角を見据えて、見知らぬ地で彫師として生きる覚悟と希望に胸をふくらませていた。間もなく、もう１人の男も同じ道を追ってきて一休みをした。２人は煙草をくゆらせぽつりぽつりと話し始めた。視線こそ合わさなかったが、腰の小荷物に視線を感じお互いに気になっていた。年配の１人が「お前さんも彫師か」と口火を切った。この２人こそ関東で名工とうたわれた同士であることが分かった。そこで相談のうえ、互いに腕試しをしようということになり、それぞれが金剛力士を彫ることにした・・・・。いかなる作品に仕上げたものか。２人は精魂込めて彫り上げた。年配の源太郎の作品は緻密で精悍な力士であり、見事なものであった。雲蝶の作品は荒削りであったが、にっこりと微笑んで梁を持ち上げ、なおも余裕さえ見せている力士であった。互いに優秀の技量をたたえあい越後に入った。弘化２年（1845）雲蝶32歳。源太郎47歳の時である。この話は雲蝶と源太郎を語る有名な逸話として伝わっている。２人はこの後も越後で作品を残し、合作もして生涯の朋友となっている。

越後に入った雲蝶は三条に向かい、内山又蔵を訪ねた。内山家の３代目の当主又蔵は金物商で江戸へ商いに行っていた。道中の宿場で品物を広げると江戸へ着かないうちに品物は売れ切れたという。旅先ではいろいろな人物に出会う。そんな中に金物を品定めする雲蝶と出会ったのであろう。三条にくれば仕事はあると・・・・。又蔵はとても信仰心の深い人で本成寺の大法要の発起人世話役を勤め、寄進にも尽力を惜しまなかった。又蔵は江戸より雲蝶を呼び本成寺の彫刻を依頼したのであった。三条に来て早速本成寺本堂の欄間および納骨堂の彫刻に取りかかり、その妙技を振るった。本成寺は明治26年本堂、客殿他を焼失。今、塔頭（たっちゅう）寺院に雲蝶の作品をわずかに見ることができる。

本成寺の南大門をくぐってすぐ右に本照院の門がある。この門は昭和49年７月に改修されている。その時に出てきた棟札に「弘化４年丁（ひのと）未歳、本年三月門の造立、本照院第22世常院日文代、工匠　三条　小黒庄兵衛、彫師　三條　石川安兵衛、大工　門前　石田勘助」の名が書かれていた。安兵衛は雲蝶の本名で名前を記してあるものでは最も古い年号である。雲蝶の足跡を知る重要な手がかりである。弘化４年（1847年）は雲蝶34歳の時である。三国峠の年齢を合わせるとうなずける。雲蝶は32歳で越後入りしたと言えるだろう。

「牛池」の霊跡を残している青蓮華院、ここでも雲蝶は仕事をしており、本成寺と並び立派な彫刻が多くあったという。

この青蓮華院も大正９年火災に会い、そのさ中に三間四方の欄間の真中にあった寝牛の彫刻が何人かにはずされ持ち出されたという。あるとき三条の古道具屋に売りに出されていたものが買い戻され、２・３人の手に渡って、今は要住院に安置されている。寝牛の横腹には欄間に組み込まれていたと思われる穴が確認される。牛はシンプルにデフォルメされている。体の裏まで丁寧に彫り込んであり、雲蝶作品の初期の特徴と見られる。

同じくこの時期に彫られたものと推察できるものに、蓮如院の置物に「柿の実をもつ猿」がある。自然木を利用した木の股に腰掛け上を見上げている猿である。

雲蝶の腕の良さは、本成寺に参詣に来る多くの人々の間から広まった。

栃尾市栃堀に巣守神社の境内の一角に、栃尾郷織物の祖神とした貴渡（たかのり）神社。桑負いと蚕の飼育の様子、繭煮と機織りの様子は、唐の風俗で充実した構図の中で生き生きと表現されている。左隅に「彫工　石川安兵衛　源雲蝶」「嘉永元申」「雲蝶之印」とある。嘉永元年（1848年）雲蝶35歳の作品である。

この後、三条はもとより居所を定めず、雲蝶は各地を歩き気の向くままに制作していた。永林時、西福寺などで多くの作品を残す。作品の構成にも研究を重ね、おおらかで充実した内容を持ち、それを鑑賞することに飽くことがない。制作年号を頼りに年表を作り、雲蝶の足跡の概略をまとめることが出来た。

これらは、「越後の名匠　石川雲蝶」（新潟日報事業社刊）の本となり読まれている。